



新古今和歌集鈔
一

特別
イ 4
3163
101(1)



貴
14
3163
101(1)

あゝいふ乃もどたはば見想望の身よの心を
 新のなるりとぞちくす満る供もすもなわあ
 るはも誰う是はぬの——まらんすはく新古今
 集の集は土法門院の由に——いまこの世に
 是れふちの、あはれとも京極黄門のじ——
 こゝに此集を父乃喪ふことをいふおひ——お
 かしめ、心りおのをも品たを——とやうる
 るさうにひいふうりきいふ——いむや
 やまの——か——を神代より侍とて物を運

新古序

卷之三

やうをすつたのこゝろある一
二十一代のわかれの玉とて
とてとて。ひそかに侍る事やいほふ
中めしめ乃たふ人の心はとて入る言葉
のあつひもむさひやさきさはあつ集ふ
こゝ侍るはゆえあつ宗祇法師もあつ居の
座もとあつ秘苑をわたりとあつまゐる
りてあつとあつとあつとあつとあつとあつ
けつとあつとあつとあつとあつとあつとあつ
あつとあつとあつとあつとあつとあつとあつ

楊政大政大臣
春三首 兼三秋 土冬二賀 二意 十四雜 八神 一釋 一

式子内親王
後白河院 亦三之皇女 萱齊院ト号

宮内卿
春二隻 一秋七 意八 雜一

俊成卿
春二秋四 冬一 意一 雜一
御堂 白道長 四代孫 權師 中納言 俊忠子也

讀人不知
春三隻 二秋二 賀一
春二隻 一賀一 意十九 神一

推中納言國信
春一
赤人和歌之秘事也 以不詳當入深

山邊赤人
春一冬一
太宰 權卿 光隆子 寂蓮 法師之曾也

家隆
春一 兼一秋三 冬二 意六 意四 雜六

仲實
春一
藤原氏 後鳥羽院ノ御中人

新古今

家持

安九孫大伴氏太宰少貳_ヲ經任陳留寺
春二志二

藤原秀能

傳藤太秀弼十代孫四條院仁治元年卒
春二秋二冬二春一秋一冬一春三雜二

西行法師

房前大臣淡海公十三代孫藤原房清子
春二夏三秋四冬五春三志二雜二神一秋一

源室之

貞元親王四代孫相摸守卜号ス
春一冬一志一

慈円

諱道快天台座主法性寺忠通公子号長水齋
春二夏二秋五冬二春一秋二志六雜六神六秋八

大上天皇

春二秋二冬二春一秋一冬一志二神二

定家

從二位山家号明靜
春四夏三秋二冬二春一離族六志十二雜三秋一

宇治園白

春一
俗名定長後賴子

寂蓮

春四夏一秋三冬賀一志四雜一秋十

行慶

春一

伊勢

右大臣内膳日野九祖真復四代孫伊勢守女
○春一夏一志四釋一

土生忠峰

府生至忠忠衛力子楊津國大目
春一

雅經

飛鳥井先祖歌翰連人京極師実五代之孫
春一秋二冬二春二志二雜三

有嘉

後鳥羽院時人号大藏卿
春二冬一春一志二雜四

能圓法師

橘諸兄公子系良九八代孫俗名長門守永隆
春一冬二春一

源具親

後堀河院御宇号内大臣
春一秋一冬二春一

德大寺光武

大御門右大臣公能子息号光武大臣實定
春一秋一冬一志一

藤原保經

春一
未考

民部卿

後堀河院典侍定家女
春一

基俊

御堂園白孫俊家子也二条家加敏之祖
夏一

新古今

荒木田成長

未考

東宮權太順

其一

号野之宮九大臣德大寺二氏
九京太夫顯補子續詞花集撰者

清補

其一冬一賀一

俊惠法師

秋三

新古今作者五人内也

通具

秋一冬二慈二雜二

顯照

秋一

六条家九京太補顯補子也

小糸

秋一

未考
大江青人六代孫信濃守成衡子

前中納言匡房

秋三雜一

大細言經信

秋二雜一

宇太天皇才九皇子敦實親王四代孫

曾祢好忠

秋一冬二慈一雜一

寬和頃人仕丹波守

人九

性不詳

和泉式部

秋二冬一慈一慈二雜一
上東門院女房大江雅致力女

俊成女

秋一冬一慈一雜三
性俊成卿之所詳也

通光

秋二冬一慈一慈五雜三
後深草院御時ノ仁也
宝治二年正月薨

堀川院

秋一

仁皇七十三白川院才二皇子

源三位賴政

秋一

六孫王四代兵庫守伊政力子
藤原中九京太補顯補力孫有家ノ父

室家

秋一

鴨長明

秋二雜一慈二神一慈一
順德院建曆九年鎌倉下向何合官氏
蓮胤

九京太補

秋一

房前大臣ノ御子眞名十二代修理太史顯宗子

道因

秋一

權中納言為補六代孫俗名敦賴後出家

二條院讀占

源三位賴政女
秋一多一雜一新一

中院公經

堀川院御宇藤成尹力子
秋一惠一

凡河内身經

甲斐小月御厨子所預、凡性行良孫
秋一

藤原資宗

未不考

家經

後白河院御宇人
冬一

俊賴

大納言經信之子息
冬一惠一雜二

成茂

未考
祇園別當其性不詳

日還

冬一
祇園別當其性不詳

湯原王

冬一
上東門院女房越前守為時女

紫式下

冬一
表一離一雜一

國房

未考

隆李

冬一
應神天皇才四皇孫

仁德天皇

賀一
未考

範魚

賀一
一条院御宇人伊勢系主能宣男也

浦親

賀一
惠一

魚光

賀一
未考

僧正通照

賀一
桓武天皇才四冬嗣公孫宗貞法名通照

大江嘉平

冬一
雜一未考

在魚葉平

哀一
阿保親王才四ノ御子在五中將トト又

中御子魚

冬一
惠二
三条系九中將利基男

加賀左衛門

未考
一忘一

九明天皇

人皇四十三代女帝也
一

聖武天皇

人皇四十五代文武帝之皇子
一

女御數子

未考
一

橘為仲

白河院應仁二年九月卒主殿頭義通子也
一

宜秋門院丹後

一忘一雜一

顯仲

具平親王三代孫
一

藤原興凡

正六位道成子
一

源德公

一条右衛門尉公也
一

藤原元真

九條右丞相師輔公二男
一

藤原實方

一条院長治四年十月十一日與列
一

大納言左木下

一忘一

前大納言忠良

近衛栗田口惡相
一

馬内侍

一条院御宇人九馬頭時明女
一

參議皇

敏達天皇王子七代孫
一

菅贈大政大臣

一忘一

花山院

人皇六十五代涼泉院才一皇子
一

源師光

一忘一

大納言忠家

堀河院寬治四年薨藤原長家子也
一

大納言忠教

京極原實子飛鳥井先祖也
一

幸清

雜一

八條前大政大臣

雜一

藤原方胡

雜一

增基

村上天皇時人

雜一

入道覺性

雜一

行通

雜一

平忠盛

雜一

安法

高倉院比人原曰非子也

如覺

雜一

藤原清正

雜一

村上天皇天德二年七月卒無庸子也

後朱雀院

雜一

因所内侍

雜一

貞院女房因所守結仲女

友近中將

雜一

未考

加茂季保

雜一

神藏不知其性

藤原行能

雜一

後堀川院清寧人

源季景

雜一

前大將賴朝

雜一

清和原氏八幡太郎源經任任將軍

皇嘉門院

雜一

高倉院女院聖子卜申奉几

藤原通信

雜一

恒德公子也正曆五年卒

小野小町

雜一

崇徳院——身羽院才一皇子人皇七十五代八帝也

土御門内大臣 雜一

義同三目母——言階葉忠女中宮白道隆室

更衣深周子 未考

赤深石魚——各度清子赤深時用女

藤原通經——仁明天皇清子迎開右大臣

小侍長 志一 雜一

清原元輔——你養夫孫恭光男

安法之伴女——安法之伴性有前

延喜法門 志一

入道前白——御堂白五代孫忠通公

光康之孫家通——近關白後堀河元仁元年卒

殿富之沈太夫 志一 後白河院白毒

八条院高倉 志一 雜一 信成女

雅成——順徳院義久三年三月流對鳥

相模——義說相模守大江公資女

并——信実女

川嶋皇子 志一 天地天皇子也

後冷泉院 雜一 後朱雀院才一皇子

大貳三位 雜一 紫衣才女父右馬頭宣孝後衣位者

嘉湖

雜一

知足院前室白

雜一

御堂室白五代孫惠實公也父二条實白子道

行平

雜一

平城天皇之子所係親王才一之傳子

二条實白

雜一

清盛殿四代孫

中務

雜一

未考

行平

雜一

舒明天皇之子

天地天王

雜一

慈惠大師之門才極恒年力子

增賀上人

雜一

后之隱号自此初万金院長保三年崩又

東三条院

雜一

人皇六十三代村上天皇才二皇子

涼泉院

雜一

批把皇太后宮

雜一

上東山院

雜一

一条院之后号東北院

天曆

雜一

西宮前太

雜一

神歌

雜一

住吉加茂

三統理平

同

中院入道

同

加茂幸平

同

社司

白川院

同

人皇七十一代後三条院皇子

貫之

同

紀文韓子古今撰者之據采

傳教大師

天台祖師又張廂山
釋一

釋一

日藏上人

朱崔阮之涉中ニ南麋國ヨリ敗ルニ好氏也

大納言御信

新

肥後

耘

經家

新

主祭

新

寂然

新

源子廣

新

魚信

俗性大憨因使人改叔字号惠信僧

新古今和歌集新鈔

春哥上卷一

去立あつたをよるに侍る

楊政大政大臣

の見る野山をまぐく白雪のうららけにまはるふたり
 より山あうとて西あうかよりハ春をむすくこと
 れどそれとて天不^{あま}言^{こと}て四時^{よに}いとつる本
 文のどくわうとて雪のうらまは色ハえと傳ふ也
 見振^み肺^{はい}也卷頭のうらまは巻上の海^{うみ}な
 らば一^{いっ}げを一^{いっ}巻の巻頭^{まきかみ}をけり心ハ一^{いっ}箇^この
 内^{うち}は巻^{まき}号^{ごう}の心を含^{ふく}めり又文字よりなりあ

里にといふよ。今この二字と云ふまゝにこそなり。こ
ういふ類のまゝの心あり。深山の雪の上はくま
てたる細まのあつたも。一り。本あり

はくまのひろいわれくまのまゝのひろいわれ
又あり。一里といふまゝの。乃に雪居の松をま
づといふなり。本あり

日。是の此山の白雪のまゝ。一雪まじく成るなり
あつたも。一り。一里といふなり。い

式子門親王

○雪の春と云ふぬねのまゝ。一雪まじく成るなり。水
物まのれ。一り。一里といふなり。い

雪の春と云ふぬねのまゝ。一雪まじく成るなり。水
物まのれ。一り。一里といふなり。い

宮内

あゝの春はさうさうな天の春なりとぞ人をも
あゝの春はさうさうの春なりとぞ人の春なり
とぞ人もさうさうの春なりとぞ人の春なり
二の句あゝとぞ人をもとぞ人の春なり

太上天皇

〇あゝの春はさうさうな天の春なりとぞ人をも
あゝの春はさうさうの春なりとぞ人の春なり
とぞ人もさうさうの春なりとぞ人の春なり
二の句あゝとぞ人をもとぞ人の春なり

あゝの春はさうさうな天の春なりとぞ人をも
あゝの春はさうさうの春なりとぞ人の春なり
とぞ人もさうさうの春なりとぞ人の春なり
二の句あゝとぞ人をもとぞ人の春なり

定家

あゝの春はさうさうな天の春なりとぞ人をも
あゝの春はさうさうの春なりとぞ人の春なり
とぞ人もさうさうの春なりとぞ人の春なり
二の句あゝとぞ人をもとぞ人の春なり

と妻の腰わたりはななり移りてはるは月つきの影なり
時ふたもさし居ゐるのさうとひくはゆきさやうに
こころも心なりとさうとさうとをわたり
いづり居るものさうとさうとさうとさうとさうと
感かん情じやうなりとさうとさうとさうとさうと

按政大政大臣

○あつたふのさうの月とさうのさうとさうと
いづりてはるは月とさうのさうとさうと
さうとさうとさうとさうとさうとさうと
さうとさうとさうとさうとさうとさうと
さうとさうとさうとさうとさうとさうと
さうとさうとさうとさうとさうとさうと
さうとさうとさうとさうとさうとさうと
さうとさうとさうとさうとさうとさうと

帰雁のさうとさうとさうとさうと

定家

○あつたふのさうの月とさうのさうとさうと
いづりてはるは月とさうのさうとさうと
さうとさうとさうとさうとさうとさうと
さうとさうとさうとさうとさうとさうと
さうとさうとさうとさうとさうとさうと
さうとさうとさうとさうとさうとさうと
さうとさうとさうとさうとさうとさうと
さうとさうとさうとさうとさうとさうと

大僧正のさう

○あつたふのさうの月とさうのさうとさうと
いづりてはるは月とさうのさうとさうと
さうとさうとさうとさうとさうとさうと
さうとさうとさうとさうとさうとさうと
さうとさうとさうとさうとさうとさうと
さうとさうとさうとさうとさうとさうと
さうとさうとさうとさうとさうとさうと
さうとさうとさうとさうとさうとさうと

伊勢

○あつたふのさうの月とさうのさうとさうと
いづりてはるは月とさうのさうとさうと
さうとさうとさうとさうとさうとさうと
さうとさうとさうとさうとさうとさうと
さうとさうとさうとさうとさうとさうと
さうとさうとさうとさうとさうとさうと
さうとさうとさうとさうとさうとさうと
さうとさうとさうとさうとさうとさうと

あゝの南はあやかりみづうらゝいぬあれたるうら
こゝろに霞あまの綾減みうらとなり。水うらに霞を
あゝあゝいさよはれおまはまゐの石仏と感して
うめりす也

柳と雲と力條先動池有波文水盡用

富内卿

つゝくちさうのあやうのうらまゐりてはてしなくものひく消
滅なりひくまゐりてはてしなくものひく消滅なりひく
けり。回きと感するうらなりと云。鏡われと云
雲のうらやゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
あゝまの雲雲ありゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
あゝまゐりゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

はるゝまゐりゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
あゝまゐりゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
あゝまゐりゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

壬生あゝゝゝ

○あゝまゐりゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
うらゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
たり。まゐりゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
目とゆゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
うらゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
うらゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
と云。春日と事。うらゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
せゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

たつと云ひなり。事の事にはくはなり。
初日教見つらふよて三月のあはるる若紙のうけに

春哥下卷二

釋阿和のあはるる九十頌一偈り一偈り
風ふふは揚るるをうとてうと

大上天皇

○楊葉を紙のあはるるをうとてうとてうとて
振して頌といふ事。八十頌よりと十年は三十
のうとてうとてうとてうとてうとてうとて
秋のあはるるをうとてうとてうとてうとて
秋のあはるるをうとてうとてうとてうとて

昨秋のあはるる。和門正遍照。七十頌。一偈
たり。例也。依るるをうとてうとて

花のあはるる。雪の色は年よりうとてうとて
はあ子。秋集は入より。後秋のあはるる。建仁二年
八月。うとてうとてうとてうとてうとてうとて
うとてうとてうとてうとてうとてうとてうとて
秋のあはるる。うとてうとてうとてうとて
氏は自。うとてうとてうとてうとてうとて
み。うとてうとてうとてうとてうとてうとて
うとてうとてうとてうとてうとてうとて
のうとてうとてうとてうとてうとてうとて
うとてうとてうとてうとてうとてうとて

何つひゆきくうきふあふやうきう
 流しなり

後成

○又やえとのみち候よりこれのをくらましのあけか
うに即といひ次の切替の通化なり又梅をあらてな
きは梅とくし梅くく候よりいなるむの香
のくくくらりたるゆきのあはれこの世のもの
ともおかしきやう面白きぶきのうらりふん
あひえううーとうふ心をくく候くあり
ゆきもくむくくくくく又んむ事くくくくく
あつた結也風情ありくくくくく

世あつてはなりされしものまふや後なりく
そつとつゆいふまををねとてふか列事なり
そのつとつゆいふまををねとてふか列事なり
のつとつゆいふまををねとてふか列事なり
けしつとつゆいふまををねとてふか列事なり
いふとつゆいふまををねとてふか列事なり
落葉のつとつゆいふまををねとてふか列事なり
まんと事也

引
風はつとつゆいふまををねとてふか列事なり
そつとつゆいふまををねとてふか列事なり

後注大寺た大長

○これとていふ楊花つとつゆいふまををねとてふか列事なり

世のつとつゆいふまををねとてふか列事なり
そつとつゆいふまををねとてふか列事なり
そつとつゆいふまををねとてふか列事なり

家持

○あつてはなりされしものまふや後なりく
曲水真つとつゆいふまををねとてふか列事なり
巴水とつとつゆいふまををねとてふか列事なり
あつてはなりされしものまふや後なりく
といつとつゆいふまををねとてふか列事なり
むつとつゆいふまををねとてふか列事なり
つとつゆいふまををねとてふか列事なり

寂蓮

〇おひらき鳥うらまをたのびんがきぬるむらぬりゆあま
 まうらう花をけりけりけりけりけりけりけりけりけりけり
 さんつら鳥うらまをたのびんがきぬるむらぬりゆあま
 〇おひらき鳥うらまをたのびんがきぬるむらぬりゆあま
 まうらう花をけりけりけりけりけりけりけりけりけり
 さんつら鳥うらまをたのびんがきぬるむらぬりゆあま
 〇おひらき鳥うらまをたのびんがきぬるむらぬりゆあま
 まうらう花をけりけりけりけりけりけりけりけりけり
 さんつら鳥うらまをたのびんがきぬるむらぬりゆあま

同

〇あまきりあまきりあまきりあまきりあまきりあまきりあまきり
 〇あまきりあまきりあまきりあまきりあまきりあまきりあまきり

人のつさふあつた風のうらまをたのびんがきぬるむらぬりゆあま
 〇あまきりあまきりあまきりあまきりあまきりあまきりあまきり
 〇あまきりあまきりあまきりあまきりあまきりあまきりあまきり

同

〇あまきりあまきりあまきりあまきりあまきりあまきりあまきり
 〇あまきりあまきりあまきりあまきりあまきりあまきりあまきり
 〇あまきりあまきりあまきりあまきりあまきりあまきりあまきり
 〇あまきりあまきりあまきりあまきりあまきりあまきりあまきり
 〇あまきりあまきりあまきりあまきりあまきりあまきりあまきり
 〇あまきりあまきりあまきりあまきりあまきりあまきりあまきり

と云詞不實也。なりたのうけあへてゐる所也。
なりたを後もして心はもてせうそのたはし
作者のものなり。

赤蓮

○船の舟なせうよす船をまむまむれりや火のほ
たせと川ぬのたざりてと云なり。船はまをわ
とれおちりぶとて。舟はく舟とて。すものあり
とれと舟を舟とて。すものありとて。よりより
むまむとて。よりより。舟はく舟とて。よりより
より舟はく舟とて。よりより。舟はく舟とて。よりより
くたりとて。よりより。舟はく舟とて。よりより
は心のよりより。舟はく舟とて。よりより。

心より人より。舟はく舟とて。よりより。舟はく舟とて。よりより
よりより。舟はく舟とて。よりより。舟はく舟とて。よりより

定家

○久あれ中なる。舟はく舟とて。よりより。舟はく舟とて。よりより
よりより。舟はく舟とて。よりより。舟はく舟とて。よりより
桂の里に。舟はく舟とて。よりより。舟はく舟とて。よりより
それより。舟はく舟とて。よりより。舟はく舟とて。よりより
て。舟はく舟とて。よりより。舟はく舟とて。よりより

松政

○いさ火のひり。舟はく舟とて。よりより。舟はく舟とて。よりより
よりより。舟はく舟とて。よりより。舟はく舟とて。よりより
業平の。舟はく舟とて。よりより。舟はく舟とて。よりより
川への。舟はく舟とて。よりより。舟はく舟とて。よりより

ねよく風なまき花のちちくくくくこの
久いんねと秋のふふふふふふふふふ
ふふふふ

振政殿

○秋葉は露のよすもさうにに里といれを秋にさけり
今うさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
いさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
かりさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう

太清つ夢通具

○あはれ女ふふふのふふふのふふふのふふふのふふふのふふふの
ふふふのふふふのふふふのふふふのふふふのふふふのふふふの

野東よハ風時雨かなもきいかなもきいかなもきいかなもきいかなも
きいかなもきいかなもきいかなもきいかなもきいかなもきいかなも

源具親

あはれの秋乃とふすさぬかり露とあけ秋のふふ風
ふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ
ふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ
秋のふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ
あはれぬふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ
ふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ

頭取

○水茎れ葉の葉葉もふふふふふふふふふふふふふふふふふふ
ふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ

本
 けりやめ、神のつとに、高を扶けいあふらんなり
 うらうれ——いづか——とて、さうなり、表裏
 の二字を、決して、表の字を、面にし、裏の字
 を、うらとよむなり、人の心は、ちて、いんしめ
 そのなり、涼氏も、舟人といふれど、——つん
 といふも、同一心なり、氷莖うきものつぎを、ひ——と、り、高を
 といふなり

川
あふさけのあさけ乃きりくまおのちりとなやあさむらえ
ゆくのあさけ乃霜のちりとなやさうくうくちり

酉

○あづまのふもとにありあけを風さぬ文城のいもろ
けあられど云はねとてつゆと又おひられといふをば

[illegible]

後成

○かきやいほり秋のまきんえさるゝ雲れはまきの
夕それのえさるゝもゝさかひより秋のまき
なりゝらぐと雲よちとつゝゝらゝなり

西行

○かきやいほり秋のまきんえさるゝ雲れはまきの
夕それのえさるゝもゝさかひより秋のまき
なりゝらぐと雲よちとつゝゝらゝなり

なすののうれと秋のまきんえさるゝ雲れはまきの
夕それのえさるゝもゝさかひより秋のまき
なりゝらぐと雲よちとつゝゝらゝなり

定家

○かきやいほり秋のまきんえさるゝ雲れはまきの
夕それのえさるゝもゝさかひより秋のまき
なりゝらぐと雲よちとつゝゝらゝなり

けしよらうらうらゆる中よまゐるを大梅柳
 楊くよゆりゆりゑ流るる雨の霞よりうたが
 田河あまもこれゆりゑ流るる雨の霞よりうたが
 思ふや田の雨あまの暮春の中よあまの雨の
 夏あまの暮春よあまの暮春の中よあまの雨の
 つゝ秋の暮春よあまの暮春の中よあまの雨の
 くる月の暮春よあまの暮春の中よあまの雨の
 暮春の暮春よあまの暮春の中よあまの雨の
 夕暮の暮春よあまの暮春の中よあまの雨の
 暮春の暮春よあまの暮春の中よあまの雨の
 暮春の暮春よあまの暮春の中よあまの雨の
 暮春の暮春よあまの暮春の中よあまの雨の
 暮春の暮春よあまの暮春の中よあまの雨の

かたしとひさしくなるかなり。又説むに暮春を
 こけりうらうらゆる中よまゐるを大梅柳
 楊くよゆりゆりゑ流るる雨の霞よりうたが
 田河あまもこれゆりゑ流るる雨の霞よりうたが
 思ふや田の雨あまの暮春の中よあまの雨の
 夏あまの暮春よあまの暮春の中よあまの雨の
 つゝ秋の暮春よあまの暮春の中よあまの雨の
 くる月の暮春よあまの暮春の中よあまの雨の
 暮春の暮春よあまの暮春の中よあまの雨の
 夕暮の暮春よあまの暮春の中よあまの雨の
 暮春の暮春よあまの暮春の中よあまの雨の
 暮春の暮春よあまの暮春の中よあまの雨の
 暮春の暮春よあまの暮春の中よあまの雨の

藤原雅經

〇まゐるやあまの暮春よあまの暮春の中よあまの雨の
 思ふや田の雨あまの暮春の中よあまの雨の
 夏あまの暮春よあまの暮春の中よあまの雨の
 つゝ秋の暮春よあまの暮春の中よあまの雨の
 くる月の暮春よあまの暮春の中よあまの雨の
 暮春の暮春よあまの暮春の中よあまの雨の
 夕暮の暮春よあまの暮春の中よあまの雨の
 暮春の暮春よあまの暮春の中よあまの雨の
 暮春の暮春よあまの暮春の中よあまの雨の
 暮春の暮春よあまの暮春の中よあまの雨の

うらりたりとやなみか橘金殿なりともうしひ
おく——とよきつひとてうらみなりとて
とはなりやうなり事ありとも秋のあき
ま——とていふとんとていふ

式子内親王

○それうき青にあらぬ秋風とてあきとていふ
秋風む——とそれうきとていふ青のうき
あきぬとていふ。あきのうきとていふ。うきとていふ。
なみか——と今よきとていふ。あきのうきとていふ。
うきとていふ。うきとていふ。うきとていふ。うきとていふ。

和泉式部

○秋とていふとていふ。秋とていふ。秋とていふ。秋とていふ。

ささきのうきとていふ。ささきのうきとていふ。ささきのうきとていふ。ささきのうきとていふ。

右清和天皇

○藤原氏のうきとていふ。藤原氏のうきとていふ。藤原氏のうきとていふ。藤原氏のうきとていふ。

後成女

○おあきとていふ。おあきとていふ。おあきとていふ。おあきとていふ。

ちりちりむなりわがあゝと涙口傳かりまの
 りふふむとこあゝとさうさういかりお今
 月あゝとこれいけおねたのあかりあゝとこれ
 なくちりあつ同い人のあかりちりちりこえ
 ねへいふ月あゝとていめとこてなり

川
 本れあつちり月の新れふつれねはまなり
 ねかりこの特の下ま老れい約とすこめすつる(通)
 振してこれさうあつちの月をさうちりあゝ
 はかとの月い感情さうとこのなれさうさうのあ
 の月とさうさう人い約とすこめすつる(通)
 書は月いあつちりさうとこのなれさうさうのあ
 後の雲はさうあつちりさうとこのなれさうさうのあ

月はいふむとこあゝとさうさういかりお今
 ちりちりむなりわがあゝと涙口傳かりまの

左邊通光

○むさし野いふむとこあゝとさうさういかりお今
 月はいふむとこあゝとさうさういかりお今
 ちりちりむなりわがあゝと涙口傳かりまの
 りふふむとこあゝとさうさういかりお今
 月あゝとこれいけおねたのあかりあゝとこれ
 なくちりあつ同い人のあかりちりちりこえ
 ねへいふ月あゝとていめとこてなり

廿二日此を下迄とありき。四山を眺めよみおせり

後三位親政

○あふひはれき風をかりめて春野のたきの月とみえ
まきやういふはれ竹の事なりふ伏のまきけ
なまきけはまきけのまきけのまきけのまきけ
誰うまきけはまきけのまきけのまきけのまきけ
いつりはれまきけのまきけのまきけのまきけ
のまきけのまきけのまきけのまきけのまきけ
よめりまきけのまきけのまきけのまきけのまきけ
あまきけのまきけのまきけのまきけのまきけ

重家

○月まきけはまきけのまきけのまきけのまきけ

秋のよれ月まきけのまきけのまきけのまきけ
まきけのまきけのまきけのまきけのまきけ
まきけのまきけのまきけのまきけのまきけ
まきけのまきけのまきけのまきけのまきけ
まきけのまきけのまきけのまきけのまきけ

天山不弁何年雪合浦可達旧日珠と云ん
ゆきまきけのまきけのまきけのまきけのまきけ

後成女

○あふひはれき風をかりめて春野のたきの月とみえ
まきやういふはれ竹の事なりふ伏のまきけ
なまきけはまきけのまきけのまきけのまきけ
誰うまきけはまきけのまきけのまきけのまきけ
いつりはれまきけのまきけのまきけのまきけ
のまきけのまきけのまきけのまきけのまきけ
よめりまきけのまきけのまきけのまきけのまきけ
あまきけのまきけのまきけのまきけのまきけ

卷之十一

ふたよりあり。そのまゝと伺つていひかゝるや

光明

○松崎や堀くらむ髪此秋の能月ハまの杯よりいひのそなは
物持ハ袖よりより月ハやとるくく人む心なをそ
あふあふくらむ袖より月ハやとるものなり
とあり

虎京奎政補

○秋風は棚の下の影をよりそれより月の影のさへけさ
雲よりありせり月をぎらくと——かあるところ
とゆらなるとん——青天白日の月をまへか
さりのなり大逆すそれくに養とる理也

道周法作

〇山のふもと雲のよききりぎりしのふきくも月ハ横きこれけり
 けきりぎり字眼也きりぎり月をぬききりぎり
 くりぎりぎりなみよりきりぎりぎりぎりぎりぎりぎり
 の一むりなみきりぎりぎりぎりぎりぎりぎり
 けきりぎりぎり月のおぬききりぎりぎりぎりぎり
 きりぎりぎりぎりぎりぎりぎりぎりぎりぎり
 たりと心なみきりぎりぎりぎりぎりぎりぎり
 一むりきりぎりぎりぎりぎりぎりぎりぎりぎり
 けきりぎりぎりぎりぎりぎりぎりぎりぎり

孝子內親王

○者のあはれを憐れむを月うついふのまじきことあり

上るの心もよひのさびしきなりとておのゝろ
らぬ月をうたふ秋の心とてささるる也あすうの晴
天の月をたふ免へばのささるる月よあつて
候へばささるるなり

折返歌

○雲をれそひささ秋風をねのささるる月をたふれ
月よ雲のめりささるる事おもしろなり雲を
秋風をひささるるなり雲をたふれ又ひ
秋風のささるるのささるるなり
うたふささるる月をたふささるるなり
ささるるなり秋風をたふささるるなり
ささるるなり雲をたふれ又秋風をた

しむ秋をひのささるるなり

同

○月をたふささるる秋の心とてささるる月を
月よ雲をたふささるる事おもしろなり雲を
秋風をひささるるなり雲をたふれ又ひ
秋風のささるるのささるるなり
うたふささるる月をたふささるるなり
ささるるなり秋風をたふささるるなり
ささるるなり雲をたふれ又秋風をた

折返歌

○月をたふささるる秋の心とてささるる月を
月よ雲をたふささるる事おもしろなり雲を
秋風をひささるるなり雲をたふれ又ひ
秋風のささるるのささるるなり
うたふささるる月をたふささるるなり
ささるるなり秋風をたふささるるなり
ささるるなり雲をたふれ又秋風をた

里人の月納うとひやうんのありうとて

式子内親王

○秋のふもろはうとて成りたうとてあつた月を
著秋のふもろはうとてのふもろとてあつた
と秋のふもろはうとてのふもろとてあつた
かろとてあつたのふもろとてあつた
さつとてあつたのふもろとてあつた
秋のふもろはうとてあつた
成をうひやうとてあつた

太上天皇

○秋のふもろはうとて成りたうとてあつた月を
いふとてあつたのふもろとてあつた

長秋も退屈せむとてあつた

長秋のふもろはうとてあつた
けふとてあつたのふもろとてあつた
なり秋のふもろはうとてあつた
とてあつたのふもろとてあつた
かろとてあつたのふもろとてあつた
ゆふとてあつたのふもろとてあつた
といふとてあつたのふもろとてあつた
とてあつたのふもろとてあつた

通光

○又よきふたのふもろはうとてあつた月を
秋のふもろはうとてあつた

人丸

○秋の暮るるをながうと田かうーおはよと
蒔のほろひするき色の秋なりーとわたり海く
身をまよひたりやうくーあふれをつとむり
時分のあたりあうろくをー田^{えが}文色は早^{はや}田^だり
霜^{しも}とー秋^{あき}ちあふなりとーとあめーと
心をこもるふれをうけーいつのあかり初秋の
ふりーうー一候より田まはなりーとうろと
おはよとーとーとーとーの秋^{あき}有^あ也秋^{あき}のうろ
とーと田^でかうーとーと初秋の心面白く石^{いし}後
風^{ふう}はうろくーあふれはうろくとーとあめあ
らーとあせ

車蓮

○おはよ秋なり露^{つゆ}ながらひと秋^{あき}あけいさぬあとは
あふろくーとーとーとーとーとーとーとーとーと
なうひとーとーとーとーとーとーとーとーとーと
白面白とーとーとーとーとーとーとーとーとーと
又やうとーとーとーとーとーとーとーとーとーと
とーとーとーとーとーとーとーとーとーと

家隆

○秋の暮るるをながうと田かうーおはよと
蒔のほろひするき色の秋なりーとわたり海く
身をまよひたりやうくーあふれをつとむり
時分のあたりあうろくをー田^{えが}文色は早^{はや}田^だり
霜^{しも}とー秋^{あき}ちあふなりとーとあめーと
心をこもるふれをうけーいつのあかり初秋の
ふりーうー一候より田まはなりーとうろと
おはよとーとーとーとーとーとーとーとーとーと
とーと田^でかうーとーと初秋の心面白く石^{いし}後
風^{ふう}はうろくーあふれはうろくとーとあめあ
らーとあせ

うきうきとありはるるを待の心よういひ
本より

本より
新古今のうきうきをとりてはるるを待の心よういひ
柱中納言と云

○夜ふねの夜ふねとてはるるを待の心よういひ
柱中納言と云

橋政殿

○里のあまの月やあまの月とてはるるを待の心よういひ
柱中納言と云

あまの月やあまの月とてはるるを待の心よういひ
柱中納言と云

○あまの月やあまの月とてはるるを待の心よういひ
柱中納言と云

新古今

本間ありともうづ月の際これ心流くの秋ハ来なり

○あま衣打とハゆくりやたひのそくあそきていふん
はなは舞武うち事と決まきりふてかなきそそ不及格
はなは舞武うち事と決まきりふてかなきそそ不及格

式子肉親五

ひきかへていふに、このまゝ受けて物持し、袖の裏ほうへくさへ
はき受えて、いづる由もなからず、事也。杖のどしとの

むしうらふはあはれかろふ取よらんかろふけり
年々くはくしとわくいあしうらふ年々くはく
野々くはくしとわくいあしうらふ年々くはく
といつあはれあはれかろふ取よらんかろふ
秋をくしといつあはれあはれかろふ取よらん
うらふ年々くはくしとわくいあしうらふ
はくしとわくいあしうらふ年々くはく
はくしとわくいあしうらふ年々くはく
いといふあはれあはれかろふ取よらん
かろふ取よらんかろふ取よらん
あはれあはれかろふ取よらんかろふ取よらん

通文

○今日あはれは尾れうらふしき誰あはれかろふ
林葉の尾れ夕日ふちうらふしき誰あはれかろふ
のうらふしき誰あはれかろふ
かろふ取よらんかろふ取よらん

天上天宮

○秋あはれあはれかろふ取よらんかろふ
養を秋あはれあはれかろふ取よらん
さうりては曲とあはれあはれかろふ
さうりては曲とあはれあはれかろふ
さうりては曲とあはれあはれかろふ
さうりては曲とあはれあはれかろふ
さうりては曲とあはれあはれかろふ
さうりては曲とあはれあはれかろふ
さうりては曲とあはれあはれかろふ
さうりては曲とあはれあはれかろふ

沙千よ

川あやゆきのさちをれまきつのはまふんまきつすも
春風桃李花開日秋露梧桐葉落時けんと面
しつさ何かなあしと何かなまけくいつり

振政殿

○藤の葉のさびしうなむろーき福うを移ん
さびしうなむろーきふしやまのさびしうのさ
の尾のば二首と本をあしとあしとあしとあしと
つるくさおとあしとあしとあしとあしとあしと

義園

○秋のあそこのさびしうなむろーき福うを移ん
さびしうのさびしうなむろーきふしやまのさびしうのさ

あしとあしとあしとあしとあしとあしとあしとあしと
あしとあしとあしとあしとあしとあしとあしとあしと
あしとあしとあしとあしとあしとあしとあしとあしと

実政

○秋のあそこのさびしうなむろーき福うを移ん
さびしうのさびしうなむろーきふしやまのさびしうのさ
あしとあしとあしとあしとあしとあしとあしとあしと
あしとあしとあしとあしとあしとあしとあしとあしと

実政

○秋のあそこのさびしうなむろーき福うを移ん
さびしうのさびしうなむろーきふしやまのさびしうのさ
あしとあしとあしとあしとあしとあしとあしとあしと
あしとあしとあしとあしとあしとあしとあしとあしと

是よりくく家隆

川
高田よりとつうを敷きつゝそれを中やうとし
てふめふめくふめつる新やぶ流のつうくわと
わつをわつ田川は流をわつとくふめつちの
なつれつうふめつちのつうくわつとくふめつち
あつやふめつちのつうくわつとくふめつち

武子内親王

○柵のよもやまかきく成はるる人なりとあるれと
 初ハ初秋は落つものあり二系まくととふれり
 の事なり古詩は 梧桐一系落天下知秋
 春風桃李花開日秋露梧桐葉落時は云々

かくてとてふ言ふ秋のころ也け柄の二葉はつらつとひ
 やーゆんといふれやけさやーらーんをさるれも。
 さーいさのまににさるるーゆんはさるいさるま
 んさるる柄のころにさるるさるるさるるさるる
 うさるるゆんやーとさるるさるるさるるさるる
 けさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるる
 さるるさるるさるるさるるさるるさるるさるる
 さるるさるるさるるさるるさるるさるるさるる
 すさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるる

西

○松より南に流るる河をりかしの秋ハ凡すさうん
け五ふまの^え河^{かう}也松ハ昔はなう^うわられしその松より

拈政殿

○高飛く人の比の秋風よまゐれといふく人のまゐれ

今更のうらとては書秘のうらなりづるはうじへま
ふのましきなきてへの神とてめんをそれとて
とらとてなり

